

あとから来る者のために
坂村 真良

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
我儘をし
苦勞をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとが続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分ができる
なにかをしてゆくのだ

U-net通信

発行:認定NPO法人 地球環境共生ネットワーク 〒105-0014 東京都港区芝2丁目6番3号三宅ビル4F TEL:03-5427-2348 FAX:03-5427-5890 http://www.unet.or.jp 編集人:U-net広報委員会/発行人:比嘉照夫

有機の里で「善循環の輪 島根の集いin吉賀」を開催 好評だったパネルディスカッション

取材/周藤

2019年6月1日(土) 島根県鹿足郡吉賀町で「善循環の輪 島根の集いin吉賀」が、「第2回しまね環境フェスティバル」とのダブルタイトルで開催された。開催地の吉賀町は、島根県にある4本の一級河川の中で最西端にあり、4年連続で清流日本一になった「高津川」の中流域に位置する。町の面積の92%が山林になり、同地の国道沿いには「有機の里」の看板が立つ山紫水明な町だ。

今回の開催で111回目になる善循環の輪の集いは、日常のEM活動の発表をパネルディスカッションというこれまでにない趣向を凝らした方法で行い、その歴史に新しいページを拓いた。



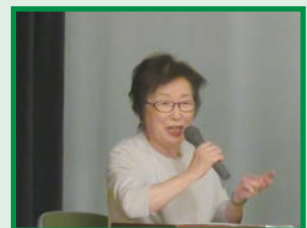
▲開会の挨拶をする高津川清流ネットワーク代表の吉中力氏

イベントは午前10時から、地元在住の実行委員や協力有志による、EM野菜・米・餅等の加工品の即売会で始まった。会場入口では高津川に生息する約60種の水生動物の中から、代表的な魚であるアユ、ギギ、オヤニラミ、ボッカ等の水槽展示が行われた。また、ワークショップは、高津川と江の川(ごうのかわ・中国地区最長河川)の環境浄化活動のパネル展示、ゼリー石鹸作りの実演、EM石鹸の販売、手芸品等の販売、株式会社EM生活によるEM製品の販売とアドバイス、朝明精工株式会社による新しい百倍利器の展示説明等が行われ、沢山の来場者で賑わった。

パネルディスカッション

午後からは「善循環の輪 島根の集いin吉賀」が始まり、高津川

清流ネットワーク代表の吉中力さんが開会のご挨拶をされた。続いて吉賀町長の岩本一巳様による、吉賀町の紹介と挨拶があった。その後、イベントのハイライトである6名のパネラーによるパネルディスカッションがスタートした。ファシリテーターはU-ネット執行委員で島根県理事の錦織文子さん



▲パネルディスカッションのファシリテーターを務めたU-ネット執行委員で島根県理事の錦織文子氏

さんが務める。まず島根県全図がスクリーンに映し出され、4本の一級河川の位置と6名のパネラーの活動地域が紹介された。

EMによる環境保全活動:

高津川清流ネットワーク代表・吉中力氏

パネラーのトップを切って活動を紹介したのが高津川清流ネットワーク代表の吉中力さんだ。吉中さんは地元小中学生の環境学習として、高津川流域の環境保全活動をEMで行っている。きれいな水にしか生息しないたくさんの水生動物が写真で紹介された。その後、EMによる学校のプール清掃、水害復旧支援のボランティア活動、EM団子投げなどの活動について説明がなされた。



▲高津川清流ネットワーク代表の吉中力氏

効果のあった鳥獣対策:U-ネット島根県世話人・村上幸子氏

次にU-ネット島根県世話人の村上幸子さんからEMによる鳥獣対策の紹介があった。村上さんは当初、畑の四隅にペットボトルを配置して結界を作ったが、猿や猪から畑を完全に遮断することができなかった。その後、活性液の品質向上に努め、畑の中央に高さ2メートルほどの棒を立て、EM活性液が入ったペットボトルを設置し、四方にロープを張ったことで、出没していた猿や猪がまったく来なくなったことが報告された。今後、U-ネットの世話人として地域のEM活動の指導的役割を担い、更に地域にU-ネット会員を増やしたいと夢を語った。



▲U-ネット島根県世話人の村上幸子氏

鳥獣対策の展望:雲南市役所林業畜産課長・高橋司氏

三番目に雲南市役所の高橋司林業畜産課長から、実験田における猪対策が紹介された。雲南市の主な鳥獣対策は、電気柵やワイヤーで圃場を囲むのが基本方針であったが、2017年6月に雲南市で開催された善循環の輪で、EMによる鳥獣対策が講演されたのを契機に鳥獣対策にEMを利用することが検討された。



▲雲南市役所林業畜産課長の高橋司氏

行政ではEMの効果が証明されないと対策で利用できないため、県の猪研究機関の飼育地内にEMで結界を作り、その真ん中に餌を置いて猪の侵入を測定してみた。結果、猪は結界の中に入り、餌を食べてしまった。市はこの結果を踏まえ更に実験を進めている。また、市内の圃場にEMによる結界を作り、猪の侵入について実験した。その結果、稲刈りまでの間に猪の侵入はなかった事が報告された。

JA出雲有機の学校受講生・矢野智子氏

次にJA有機の学校(2年制)の受講生である矢野智子さんから、穴熊による農作物(西瓜)への被害がEMの結界によって解決するまでの経緯が報告された。矢野さんが住む出雲市北山地区は、猪・ヌートリア・狐・狸・穴熊が出没し、西瓜に被害を及ぼしている。当初は西瓜にネットをかぶせて対応したが、穴熊が土の中から潜ってネットの中に入っていることが判明し



▲JA出雲有機の学校受講生の矢野智子氏

た。悩んでいたときにJAの広報誌でJA有機の学校で鳥獣対策の講演があることを知り、講師の錦織理事からEMによる鳥獣対策の指導を受けた。早速、畑に5m間隔でペットボトルを設置して結界を作り、西瓜にセラミックスをかけて対策を行った。結果、結界外の地面にはいくつもの穴が開いていたが、西瓜畑の中への侵入はなかった。同様に夜になると自宅の天井裏に出没するイタチで困っていた。畑と同様に家の周囲も結界を張った結果、イタチの侵入も全くなかった。EMによって家も畑も鳥獣の侵入から遮断することが報告された。

清流日本一に向けた水系再生活動:石見ケーブルビジョン会長・U-ネット島根県世話人・今井聖造氏

五番目に石見ケーブルビジョン会長で島根県世話人である今井聖造さんから、水環境再生山陰ネットワークの結成目的や、活動の一環である「江の川を清流日本一にする会」の活動理念が説明された。



▲石見ケーブルビジョン会長でU-ネット島根県世話人の今井聖造氏

今井さんは山陰地区を自分の子供の頃の水環境に戻すという目標を掲げ、ダム建設業や築堤業など水環境で仕事をしている企業にネットワークへの参加を呼びかけた。その結果、約100社の企業が加盟して水系浄化活動を行い、ケーブルテレビで経過報告を行うなどして社会に活動をアピールしている。ネットワークは次第に活動の幅を広げ、江の川源流域の広島県三次市漁協との協議等、県を跨いで浄化活動を行うまでになった。江の川で成果を出し、そのノウハウを国内に広めたいと意欲を表明した。

EMで実践する社会福祉:

江の川を清流日本一にする会副会長・原田ミヤ子氏

最後は「江の川を清流日本一にする会」副会長の原田ミヤ子さんから、藻が繁殖し汚れていた池を浄化するためにEM技術勉強会を開催し、鯉の泳ぐ姿が見えるまでに浄化できたこと、畑に結界を作ってから猿が来なくなった事などがリアルに報告された。また、昨夏の豪雨で100件以上の床上浸水にあった桜江町をEMで臭気対策し、住民から大変感謝された報告もあった。



▲江の川を清流日本一にする会副会長の原田ミヤ子氏

最後は特別講演として比嘉教授からEM活動のポイント(自分でも考えながら改善にトライして効くまで使う)、使用する時の心構え(感謝、想念の管理、フォトンへの影響)や発酵効果等の実例説明が行われ、島根善循環は閉会した。

EM先進国島根県の未来像

今回の島根善循環は、県内在住の15名の実行委員が数回にわたる実行委員会を開催し、企画・構成・運営まで詳細にプランを練り上げた。その甲斐あって島根県はもとより、近畿中国地区、遠くは宮城県仙台市からも来場者があり、200席の会場は満席となる大盛況であった。この場を借りて実行委員に敬意を表したい。また、参加者の多くは島根県内各地で長年、より高度なEM技術の習得を目指し、錦織理事を中心に絶えず勉強会や講習会を開催し、技術力の向上に努めている。

錦織理事と県内のEM関係者は、EMによる水質浄化、有機農業、鳥獣対策、環境学習、社会福祉の実現を島根県の未来像に設定し、全県が一丸となって善循環の蘇生活動に取り組む。



新たな試みは大成功

～海水EM活性液とEM団子を使ったプール清掃～

取材／杉山

全国的な拡がりを見せるEM活性液によるプール清掃は、昨年に引続いての実験成功で新たな段階を迎える事になりそうです。これまでのEMプール清掃では、標準的な25mプールで水道水を使ったEM活性液(150リットル)を秋と春の2回(都合300リットル)投入が不可欠でした。

これによる効果は観面で、嫌な臭いから解放されると共に、プール清掃作業が劇的に軽減され、短時間で終わることができるとの評価を得ていましたが、EM資材提供者からはEM培養設備や運搬手段の大型化が課題との指摘もありました。

今回のEMプール清掃では、学校関係者の評価はそのままに、EM資材提供者の課題解消を実現できる画期的な方法となりましたが、考案した宮崎市佐土原町で活動する「みやざき有機栽培研究会」代表の白川孝重氏(U-ネット会員)の取組みを紹介します。(動画配信予定)



▲宮崎市立那珂小学校プール清掃の様子

大きく変わったEMフォーメーション

標準的な25mプール清掃に必要なEM資材

- ①海水EM活性液(30リットル)
- ②EM団子(テニスボール大40個)

しかも、プール清掃の1か月～2週間前に1回投入するだけで十分な効果が期待できると、白川孝重氏は言う。

海水EM活性液はプールの数か所に均等に流し込み、EM団子は玉ねぎネットに10個ずつ入れ、プールの四隅にあるステップラダーより水中にぶら下げて使う。



▲海水EM活性液投入の様子



▲玉ねぎネットに入ったEM団子の様子

作業時間は約1時間

今回の新たな試みを行ったのは、宮崎市立那珂小学校で、昨年に続き2回目となりました。事前にプール底部に遊離したヘドロや苔に交じって大きなカエルやオタマジャクシ等を視認し、自然の生態系に沿った営みを確認後に、先生(5名)と児童(約100名)によるEMプール清掃作業開始。あいにくの小雨模様でしたが、モップやバケツ等を使った作業は約1時間で終了。見違えるようになりました。お疲れ様でした。



▲綺麗になったプール

有機農業の町「綾町」はEM先進地

宮崎県綾町

綾町は町ぐるみで有機農業の町、照葉樹林都市を町のスローガンに掲げ、町起こしに成功した町。照葉樹林からの自然の恵みである「水」により湧水の町としても有名。綾町水を守る会はこうした自然資源を守る為に結成された女性による団体で、中でも廃油や食品残渣を減らし再利用する活動を展開している。



▲綾・手づくりほんものセンター



▲びゅあらいふ綾会長の谷口みゆきさん



▲廃食用油石鹸製造施設で作ったEM石けん

廃食用油石鹸製造施設は綾町の支援を受けた施設で、EM 仲間の活動拠点でもある。

びゅあらいふ綾（環境浄化活動団体）会長・谷口みゆきさんもその一人で、町会議員の山田由美子さんと仲間と共に、EMボカシやEM活性液に加え廃油石鹸も製造する。製品は町役場に隣接した綾・手づくりほんものセンターで「綾のEMエコせっけん」として、固形石鹸は200円、粉石鹸は400円で販売され、住民に水を守る事の大切さを啓蒙すると共に貴重な活動資金を得ている。

EMで太陽のタマゴ・マンゴー栽培

宮崎県宮崎市佐土原町

みやざき有機栽培研究会の新名篤宏氏は敷地の一角にEMを使ったマンゴー栽培の為にビニールハウスを1棟展開する。約10本のマンゴーの木には10cm程に成長したマンゴーが多数に見ることができるが、収穫は1月以上先になるそうだ。マンゴーは元々熱帯地方であるインドが原産地ながら、比較的暖かい日本の沖縄や宮崎、熊本等で栽培されるようになった経緯がある。

新名氏によれば冬の暖房は欠かせない事、マンゴーにあった

土壌改良が不可欠な事、成木であっても15年前後で植え替える必要がある為、商用ベースに乗せるのはなかなか難しいと言う。それでも身体が動く内は続けるとの事。



▲マンゴーのハウス栽培をする新名篤宏氏(右)と白川孝重氏(左)

河川の土手でEM玉ねぎ栽培

宮崎市

みやざき有機栽培研究会の中西重雄氏の2万本にもなる玉ねぎ栽培には常にこだわりがある。まずは一人で栽培する事、その為には自身が健康である事、お金を掛けずに創意工夫で自前の農機を開発



▲刈草堆肥の出来栄を見る中西重雄氏

する事、EMによる堆肥(牛糞との刈草、EM活性液やEMボカシのサンドイッチ構造)作りの時間を惜しみなく作る事にある。

御年81歳になる中西氏の日課は朝4時起床後に畑作業、朝食、20kmウォーキングで体力作り。特に堆肥用雑草の刈込作業は、近くを流れる石崎川の左岸約2kmで年3~4回行う。もちろん一人で。

護岸が綺麗になり人に喜ばれ、刈った草はEM堆肥として再利用され、玉ねぎ栽培は順調そのものである。



▲石崎川の堰堤



▲収穫間際の玉ねぎ



▲自作の農機具



2019年度 U-ネット 年間主要行事計画

下記は2019年7月現在の予定です。変更される場合がございますので、ご了承ください。

開催日	行事名
7月15日(月・祝)	海の日全国一斉EM投入
10月5日(土)	善循環の集い(福島)
6日(日)	世話人特別講座(北海道東北地区)
20日(日)	善循環の集い(石川)
21日(月)	世話人特別講座(東海北陸地区)
26日(土)	善循環の集い(徳島)
10月27日(日)	世話人特別講座(四国地区)
11月27日(水)	善循環の集い(鹿児島)
28日(木)	世話人特別講座(九州沖縄地区)
30日(土)	善循環の集い(東京)
30日(土)	世話人特別講座(関東甲信越地区)